



特集 夏の海外体験

第1回「モンゴルスタディーツアー」、「高校生親善訪中研修旅行」、「日中青年会議」に参加した生徒諸君のレポートを掲載します。

7月22日～29日でモンゴルスタディーツアーを実施しました。中学3年生が10名、高校1年生が5名参加しました。ツアーでは、提携校である新モンゴル学園との交流を深めました。新モンゴル学園のサマーキャンプでは、ゲルに宿泊し、広大な草原の自然と文化を体感しました。ウランバートルでは、日本大使館や JICA の施設を訪れ、モンゴルが抱える課題を知り、その解決に向けての取り組みを学びました。

遅くなりましたが、今回は3名の参加者の報告をします。(生物科教諭 関口伸一)

3年 島 倫太郎

モンゴルでは自分の至らなさを痛感した。しかし、一方でそうした経験が自信に繋がったことも事実である。スタディーツアーに行ったたった2人の数学部員の1人として、滞在5日目の数学交流会のことを例に述べよう。

数学交流会は午前の部と午後の部に分かれ、午前は海城側(5組の山田氏と筆者)が日頃の数学研究で得られた結果について発表し、午後は新正氏を含めた海城側とモンゴル側とでどちらが数学の問題をより多く解けるか対戦した。

午前の部は、新モンゴルの生徒さんが完璧な通訳をしてくれたため言語の壁を感じることもなく、研究で得られた結果に対する新鮮な感動を彼らと共有できた気がした。中には私の研究に興味を持ち、未解決の部分について一緒に考えてくれるという生徒さんもいた。自分は現在岡山の学校と共同研究



(新モンゴル学園の数学の先生達と記念撮影)

をしているが、この時共同研究の輪が海外にまで広がったということに、驚きと喜びを感じた。午後の部は研究発表の終了後すぐに始まった。相手チームはモンゴルの進学校である新モンゴル高等学校、数学の授業が全授業の半分を占めるというオロンログ数学学校の混成チームであり、対戦前もちろんやる気満々ではあったが、一方で頑張ってもどうせ勝てないだろうという思いも頭をかすめた。ルールは全部で4題ある問題をより多く解けた方が勝ちであり、1問目は両チームとも正解した。相手チームの醸し出す余裕はこちらにプレッシャーを与えたが、海城チームも新正君の直感力と山田君の頭の回転の速さに助けられ、正解できたのだ。しかし、2問目は不本意にも海城側のみが落とすこととなった。私は、その問題の類題をみたことがあったが、定理の使う順序を間違い答えが1ずれてしまった。そのため、自分の責任の重さを痛感した。3問目は順当に両チーム正解したが、海城側としては残り一問となった段階で4-6とリードを許すこととなってしまった。こうしてあつという間に最終問題となった。最終問題は難易度の高さゆえ部分点ありの4点問題で、十分に逆転可能だった。だが、海城チームは問題文の解釈を間違え、結局相手チームと同じく2点しか獲得できなかった。

敗因を自分なりに考えてみたが、やはり始めから諦めかけて試合に臨んでいたことが一番の理由であったと感じる。また、解けない焦りにより冷静さを欠いたことも一因であろう。しかし、いくつかの収穫も得ることができた。世界の数学オリンピックで活躍する選手がいるモンゴルチームにこれだけ食いつけたことが、むしろ我々の数学力に対する自信に繋がったことは事実である。また、問題を解く間彼らとは敵同士であるはずだが、数学への情熱という意味で強い一体感を感じることができ、改めて自分は数学が好きであるという確信を得ることができた。

こうして盛り上がる中、交流会は和やかな雰囲気の中で幕を閉じた。この交流会は、自分に不足している点、それも勉強不足の話のみにとどまらない部分と向き合う機会となった。また、その後の生活におけるモチベーションも上がった。この度の対戦は惜しくも敗れたが、次回の対戦に向け、私の密かな努力は始まる。

3年 橋本 匠

私はモンゴルスタディーツアーに参加して、貴重な経験を積んだ。その中でも特筆すべきはやはり「ゲル(パオともいう)」での生活体験である(ゲルとはモンゴルの遊牧民が使用している伝統的な移動式住居のこと)。ゲル内はテントとは比べ物にならないくらい快適な環境だった。暑い昼では風が通ってある程度涼しく、寒い夜は風が通らないようになりある程度暖かくなっており、服の心配は杞憂に終わった(朝になったら冷たい風が入ってきて目覚めにもちょうどよかった)。トイレはぼつとん便所で匂いがきつく、夜になったら落ちる恐怖や暗闇と戦いながら用を足していた。もちろんウォッシュレットはない。文明の利器の有り難さを身にしみてわかるとはこういう事なのだろうと思った。食事は羊、羊、羊。間食(≒おやつ)も羊の時はさすがに驚いた。時々出てくるパンはまるで神様みただった(その有り難さからお土産に購入したが、すぐに腐ってしまった)。このような生活を毎日している遊牧民の方々に尊敬し、今までの食事全てに感謝した。母さんありがとう。



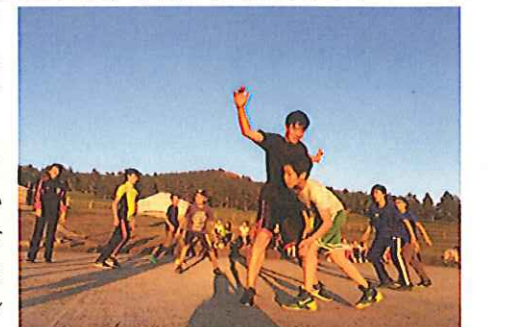
(宿泊した新モンゴル学園のゲル)

また、ゲルでの生活体験は新モンゴル中学の生徒と共に行ったので、たくさんの交流をすることもできた。生活体験の3日間のほとんどはバレーボールやバスケットで、あつという間だった。ゲル生活の中で1番を決めるとしたら夜の星空である。今まで見たことのないような夜空で本当にキレイだった。上を向くと星、星、星。人工衛星の動きを目で追えたこともうれしかった。

ゲル生活を通して、日本の便利さ、特に食事の有り難さを改めて実感した。ありきたりな表現になってしまうが、この一言に尽きる。

4年 瀬戸章介

一番記憶に残っているのはゲルでの生活だ。新モンゴル学園の12、3歳の生徒たちのサマーキャンプにお邪魔したが、自由に遊んで交流する時間が多く、日中は男子たちとバスケットを通して交流するのがほとんどだった。ある試合の時ジャンプボールを頼まれ「3.2.1」とカウントダウンをしながら上げたが、少し早く上げてしまった。すると一人の子に「This is real.」と怒られてしまった。日本ならツッコまれる程度だろうが、試合中も手を抜かないモンゴルの人たちの勝利に対する貪欲さ、勝負を成立させるための公平・平等性を重んじる姿勢が垣間見られた。また、チーム決め、ルールの確認は英語でコミュニケーションを取ったが、僕よりも向こうの子たちの方が英語が上手く、情けなく思えた。自分より年下の子より英語ができないと思うと、「英語を勉強しよう」という気持ちになれるので、語学という面でもいい発奮材料・刺激を得られた。



(20時頃にやったバスケットボール大会)

また、国際交流の基礎も学ぶ事が出来た。石塚先生が主体的でない僕たちにおっしゃった「500倍でしゃべれ」という言葉はこれからも忘れないでいたい。新モンゴル学園での交流会では、年上の高校生とお話ししたが、日本語がとても上手で、日本人と話している感覚だった。また、日本が好きの方が多く、モンゴルの話だけでなく、日本の漫画の話で盛り上がられたのは意外だった。国際

交流においてアニメ・漫画がどれほど大きな武器になるのか体感することができた。このスタディーツアーでモンゴルについて学んだだけでなく、自分から積極的に行動する自信が付き、大きな収穫を得ることが出来たと思う。

中華人民共和国を訪れて 4年 須田光太郎

皆さん夏休みは何をして過ごされたでしょうか。実は、皆さんのあずかり知らぬところで、私と岡先輩、金先輩、山本先輩の計4人は「第2回高校生親善訪中研修旅行（以下、『中国研修』）」なるものに行ってきましたので、その話をつらつらと書かせていただきます。

「中国研修に行ってきた」と言うのだいたいの人に失笑されるか「え、モンゴル？」と聞き返されるほどに陰に隠れてしまっていた中国研修ですが、スゴク実りのあるものでした。その片鱗をご紹介する前に、まずは簡単にこの研修の概要を説明しましょう。

中国研修ですが、ものすごく簡単に説明すると「日本の高校生が中国に行き、実際に観光や現地の方々（学生や外交官の方々など）と交流をすることで見聞を深めよう」という目的の研修旅行です。今年は東京都・埼玉県の計6校の27名の学生及び5名の引率の先生方との旅行になりました。ちなみに、中国大使館もサポートしてくれるれっきとした交流プロジェクトです。（そこまでお堅いものでもないですけどね）

さて、本題に入りましょう。道中何をやったかというような話は端折って、ここでは結論から言って何を得られたか、という話をします。

まず、もちろん中国への理解・見聞が深まりました。実際に歴史的な景勝地や観光地（長城、故宮博物院など）を訪れたり中国料理（北京ダックとか）を食べたり、町中を歩いたり伝統芸能を鑑賞したりしたことで、生の中国を知ることができました。また、一緒に行った学生や先生の皆さんがとても知見のある方々ばかりだった（特に僕は高1で最低学年だったこともある）ので、色々な議論や意見交換ができたことも大きかったと思います。また、現地学生や中国で働いている外交官や商社の方との交流会では、中国で仕事や勉強をすることについていろいろな話が聞け、中国での生活を知るいい機会になりました。

二つ目に、交流範囲が広がりました。まず、一緒に旅行をして数々のイベントやトラブルを共にした仲間たちとは、とても深い絆が築けたと思います。そして、現地の学生とも友達になることができました。今でもときどき連絡を取り合ったり取り合わなかったりして、お互いの文化の話などをしていきます。

あとは、、、実際に行った人とかに聞いてみてください。僕は基本的に4-4のHRにいるし、高2の人たちに話を聞くのもいいでしょう。

とりあえず簡単にまとめると、なかなかできない体験がいっぱいできた研修旅行でした。日本や中国の様々な人と色々な話ができる、3万円で行ける、普段出会えない知的な刺激がある、旅行中のトラブルも体験できるなど、枚挙に暇がないほど様々な魅力にあふれた研修旅行でした。

今中学生とか高1の人は、今後の機会に応募してみてもはどうでしょうか。

最後までご精読ありがとうございました。谢谢阅览!!

日中青年会議 3年 平田泰之

今年1月ごろ、グローバル通信で、日中青年会議の紹介があった。日中青年会議とは、毎夏、United World College 香港校で開かれるもので、日本人中高生20名、中国人（中国本土&香港）中高生30



名が参加する、1週間のキャンプである。主催していたのは、世界中のUWCの生徒（日中香港人）達で、今年は、元海城生の先輩も関わっていた。私は、もともと香港生まれであるため、久しぶりに香港に行きたいな〜、という思いで応募したのだが、運良く一次試験（英語と日本語のエッセイ）を通り、二次試験へ進んだ。これは、参加年度の主催者を相手に英語と日本語での面接で、私の相手は、先に記した、元海城生の方だった。一次のエッセイでは、現在の日中問題や自分の日本人らしさについてがお題で、二次では、それに関して更に深く、また、自分が日中問題解決にどう携われるかを聞かれた。そして、無事日中青年会議への参加が認められた。参加前には別の課題があり、日中問題の歴史に関する本を数冊読み、またエッセイを書いた。

参加時、皆と英語が通じないのでは、ということと、中国人達の日本に対する偏見などを恐れたが、英語は問題なく、ただ内容について行くのが難しかった。会議では、主に日中問題の歴史・現状・解決に関して話し合ったが、他にも3か国の文化を知り合うイベントや、香港探索を行った。

最初、日本人の参加者で、羽田空港で集まり、そこから香港までまとまって行く形であった。高校生など上の学年の方が多かったが、同じ学年の知り合いがいたため、独りになることはあまりなかった。また、他の参加者が話しかけて来てくれたため、緊張がほぐれた。

香港に着いたら、バスでUWC校まで向かい、部屋に荷物を置きに行った。部屋は、すべて4人部屋で、私の部屋は中国（本土）人2人、香港人1人、日本人（私）1人で、一部を除いて、仲良く英語で話すことができた。ルームメイトは皆おもしろく、深夜まで自国の彼女と話している人や、一日中ルービックスキューブの話をしている人がいた。1日目は、その後夕食を食べて、開会式の様なものを行い2日目に備えた。

2, 3日目は、Cultural Sessionというお互いの文化を紹介する時間が合った。少しずつ日中関係のことも話し、それを背景に問題解決の仕方などを話し合った。英語が決して得意ではない人もいたが、通訳を通して、皆、思いを伝えることができた。

4日目は、香港探索だった。これは、バディグループという、3か国混ざったグループに分かれ、運営のオーガナイザー数人と一緒に、様々なチェックポイントやミッションの様なものを通して、行ったことのない場所や、久しぶりに行くような場所をまわった。また、探索をしながら、他の参加者などと日中関係の事はもちろん、学校や普段の生活に関して話せた。途中、香港人の仲良くなった友達に、今から逃げ出して家に来ないか、と誘われたが、一応断っておいた。

5, 6日目は、1, 2日目と似たようなことをしたが、更に深く掘り下げたディスカッションをし、中国人と日本人で、一度言い合いの様な事になったが、無事収まった。夜は、最後のパーティーがあり、盛り上がった。

最終日は、中国の特に仲良くなった何人かの友達と別れを惜しんだ。あっという間の、1週間だった。

中国人と言っても、今回参加したのは、世界に目を向けた人たちなので、いわゆる日中関係を危惧する必要もなかった。また、暑さを心配した香港だったが、部屋はエアコンが効き過ぎで寒すぎるうえ、多くの蚊に悩まされた日もあった。しかし、とにかく楽しく、充実した1週間だった。そして、これを機に、中国のことをもっと知りたいと思った。地方出身の日本人も何人かいたので、大学見学等で、東京に出てくるとき、何度か会う機会があった。

皆さんも是非、参加してみてください。

